
螺旋の絆

高橋あきら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

螺旋の絆

【Zコード】

Z9308X

【作者名】

高橋あさり

【あらすじ】

平凡な女子高生の秋穂は、ある日突然幼馴染の志信と妖に襲われてしまふ。そこを助けてくれたのは、あの有名な今村翔華と不思議な力を持つ謎の転校生だつた。今までの平凡生活は一転てしまふ。妖とは?今村家とは一体? 学園和風ファンタジー。

登場人物

話の進行について増えていきます。

@香住 秋穂 / Akihiko Kasumi
宮野森高校二年。

主人公。

平凡を絵に描いた少女。

運動神経は皆無に近く、根っからの文系。

学業は芳しくないが、頭の回転は良い。

母親を幼少の頃に亡くし、父方の祖父母と父の四人で暮らしている。

@清田 志信 / Shinobu Kiyota
宮野森高校一年。生徒会一年副会長。

秋穂の幼馴染。

基本冷静で落ち着いてる。

勉強もできてスポーツ万能、所謂美形のためもてる。

毒舌。

@今村 翔華 / Shionka Imaura

宮野森高校二年。クラス委員長。

茶髪の巻き髪、がつりメイクという見た目に反して、成績優秀運動神経抜群。

生まれ持つてのカリスマ性で、人に指示を出すのが得意。色々な噂が絶えないが、天性のカリスマ性のため表立つてみんなは何も言わない。

今村家現当主。

@今村 之人 / Yukihito Immamura
秋穂のクラスにやつてきた転校生。
綺麗系だが、笑うと可愛いらしい。
性格は悪くない。

成績は上の中。運動神経もいいため、体育の成績も上々。
人の感情には敏感。
狩人の一人。

@篠田 夏南 / Kanan Shinoda
宮野森高校一年。生徒会書記。

元気少女。

小柄で可愛らしい。

治癒を得意とする篠田家で高い能力を誇る。

@篠田 ユキ / Yukie Shinoda
二十代後半。

今村の本家のお手伝いさん。

和服が似合う美人。

夏南の異母兄弟（姉）。

@燈織 / Hiori

“暗”と呼ばれる一族。

情報収集や記憶操作、暗殺といった表にはでない仕事をこなしている。

燈織とは今村当主直属の者に『えられる名前。

「ぼーっとしてたぞ、大丈夫か？」

横を見れば、心配そうな顔をした幼馴染がこちらを見ていた。

「おい、秋穂。」

「ちは田覚めた。

時は近い。

応え。
応えよ。

「うん。『めん、志信。』

志信曰く、どうも私は最近こうしてぼーっとしていることがある、らしい。立つたまま寝るなんて器用だな、なんて前に言われてつい怒つたけど、あながち間違いじゃないのかもしれない。

夢を見ている。ただ正気に戻ると全て忘れてしまっているけど。思い出したいけど、思い出せない。

思い出せない夢は、まあ、さておき、どんな状態でも夢を見るほど寝ているのだ。正直自分でも呆れ半分、驚き半分だ。

紅葉が美しい並木道を歩き、学校が見えてきたところで何となく自分の体に異変を感じた。

肌がざわざわと粟立ち、心臓がまるで運動した後みたいにぐくぐくと早鐘を打つ。あきらかにおかしい、変だ。

「し、志信、何かわかんないけど、変な感じがする。」

「秋穂？」

私の顔を覗き込むために前に志信が立った。そして見てしまった。その後ろに現れた、血のように赤い瞳と獣のような大きく鋭い爪を備えた手を振りかざした“人のようなもの”を。

「志信つ

叫んだ時には時すでに遅く、志信は背中を切り裂かれ、私の方に倒れ込んでいた。抱きしめた志信の背中からは止めどなく生暖かい紅液体が滲み、制服を浸食し、支えている私の手も染め上げた。ふと頭上に陰が差したように思い見上げると、焦点の定まらない瞳が私を捉え、志信の血が付いた手を大きく振りかぶる。

強く目を閉じて、来るべき時を待つた。が、何もない。痛みもない、

それどころか生きている。おそるおそる瞳を開けると、そこには私達を背に立ち、刀の背で押さえ込んでいる女の子がいた。

(あれ? この人……。)

「之人!」

大きな声で男の人、と思わしき名前を叫ぶ。その瞬間、いつの間に現れたのかうちに高校の制服を着た男の子は音もなく“例の者”的後ろに立ち、流れるような動作で何か鋭利なものを切つ先が貫通するまで心臓に突き刺した。

耳が裂けるかと思うほど断末魔の叫びをあげ、驚くことにそれは光の粒子となり霧散した。

一連の流れをただただ見ていたところで、はっとする。私の腕には傷付いた志信がいる。呼吸が浅く、血が止まらない。このままでは出血多量で死んでしまう。

「志信、やだ、しつかりして。死なないで。」

頬を涙が伝う。だからなのかなんなのか、体中が熱い。まるで血が沸騰しているみたいに。何だか耳が遠く聞こえる。

アハハハハハハハハハハ!

なぜかはわからないけど、頭に女の人の甲高い笑い声が響いた。本当に愉快だ、おかしい、そう言いたげな笑い声。
頭が痛い、やめて、その笑い声を止めて。じゃないと

「香住さん、香住さん」

強い声で私の苗字を呼ぶ人がいる。ゆっくりとそちらに焦点を合わすと、頭の笑い声は消え、体中の血が沸騰するような感覚が収まつた。

さつきの笑い声がすつごく嫌でしかたがなかつた。止めないとどうするつもりだつたんだろう。まあ、いいか。それよりも志信だ。

「いつ今村さん、志信が！」

「大丈夫。」

そう言うと私を呼び起こしてくれた人、もといクラスメイトの今村さんは手を志信の患部に当てる。すると手から光が現れたかと思うと、傷口に吸われるようにして消えていった。志信の顔色は良くなり、出血を止まり、呼吸も通常と何ら変わりなくなつた。

今は静かな息で寝ている。

「もう大丈夫。三十分くらい保健室で休ませてれば、後はけろりとした顔で授業を受けるれる。」

「わかった。助けてくれて、ありがとう。」

今村さんたちがいなかつたら、確実に私達は助からなかつた。本当に感謝している。だからお礼を言つた。

すると今村さんは目を大きく見開いていた。私は無意識のうちに、何か驚くようなことをしたのだろうか。

「君は、俺達の力に疑問を持たなかつたのかい？」

今村さんの後ろに控えていた人と呼ばれた男の人 私を直接的に助けてくれた人がそう聞いてきた。

今まで一言も話さなかつた分、何だか重たく聞こえる。

「俺達、て」

おもむろに手を出し、一振りする。するとその手は光り輝き、鋭利な刃物になつていた。

そう、鋭利な。何ものも切り裂けるほどに研ぎ澄ませた。

（ああ、これで刺したんだ。）

男の人は何も言わないけど、このタイミングで出すところとは、そう言つことなのだろう。

今村さんの一瞬にして志信を治した力と、この人の瞬時に手を刃物に変える力。それらは人ならざる者の力で、常軌を逸している。でも不思議と私はそれに怯えたりはしなかつた。

「正直ちょっと驚きましたけど、大丈夫です。」

「そうか。」

私の言葉に安心した夫人さんはにこりと笑つた。

志信と同じで、綺麗な顔の部類に入る人だと思うけど、笑つた顔は可愛い。これがいわゆるギャップっていうものなんだだろう。さぞや女の子にもてるんだろうなあ。

「さて、そろそろ移動しないと。もづじき登校する生徒たちがやつてくるだらうし。之人、清田を保健室に連れてつて。場所は西昇降口から入つて左にあるから。」

「わかった。」

私から志信を預かると、瞬きした時には消えていた。瞬間移動？ま

あ、これも彼らの力のうちの一つなんだね。

何にしても、私一人で志信を抱えて歩いていくのはちょっと骨が折れただろうから、助かる」とこの上ない。うん、感謝感謝。

それにもしても、あの今村さんと話しているなんて変な感じ。

うちのクラスの中で一番明るくて、本当に今風の人で、私とは正反対のタイプの人。多分、さつきの事件が無ければ、きっと係わり合いになることはなかつたんだろうな。

「立てる?」

手を貸そうか、とも言われたけど私は何一つ怪我をしてなかつたら、丁重にお断りして自力で立ち上がった。

安否の確認も兼ねた問い合わせだつたみたいで、大丈夫だとわかると、今村さんに促され学校への道を歩くことになった。

「あの、今村さん。」

「なーに。」

「もしかして、ユキヒトさんって、転校生?」

「そうだよ。今日付けで、宮野森高校の生徒になる。」

やつぱり。さつき志信を運ぶ為に保健室の場所を教えてたから、そうじゃないかなあとは思つてたんだけど、どうやら当たりらしい。でも転校生なのに、もう知り合いなんだ。友達なのかな。あ、彼氏、とか?

「変な誤解される前に言つとくけど、人は親戚だから。」

釘を刺すように言われてしまった。ごめん、その変な誤解後です。転校生、か。何年何組に入るんだね。んー、まあ、いつか。その

うち聞いてみよう。

「にしても、香住さん朝早いんだ。」

「ああ、今日は特別。何か目が覚めちゃって。で、志信は週番だつたから朝早いし、一緒に来たの。」

あんな状態じゃ、週番は無理かな?でも、大丈夫だよね。もう一人いるし。

「今村さんこそ、朝早いんだね。」

人のこと言えないよ、そう言つたら今村さんはけらけら笑つて、それもそうだ、と言つた。

何となくだけど、今村さんつて朝とか苦手そうなイメージがあるから、早い時間の登校つてちょっと違和感がある。なんて、失礼なこと、幼馴染の志信ならともかく、あの今村さんには言えないから心のうちにそつとしまつておこう。

何だかんだで話しながら歩いているとあつという間に教室に着いていた。今村さんは廊下側の前の席、私は窓側の比較的後ろの席、ドアで軽く挨拶して各自の席に着いた。

道すがら一つ前の席の子に挨拶し、席に着きかばんを下ろす。机の上に広がる一校時目の古典の教科書やらノートやらが置かれているのを見ると、宿題をしに早く学校に来たんだということがわかつた。

「ねねっ、香住。あんたあの今村翔華と一緒にガッコに来たの？」

耳打ちするようにひそひそと彼女はそう尋ねた。事実だし、私はその言葉に頷き授業の準備をし始めた。

「あの大人しい香住がやるねえ。今村の噂、知らないわけじゃないんでしょ。」

大人しいかどうかはわからないけど、今村さんの噂を知らないわけがない。

派手な外見、どんな人でも物怖じしない態度、そしてまあ、平たくいえば口が悪い。しかしながら、成績は学年一位で、運動神経抜群、生徒会長に推薦されるくらいのカリスマ性、そして実家はあの今村。この町で最も力を持つていて今村の娘さんなだけに表立っては言わないが、実は裏で援助交際してるのでないか、どこぞのレディースの頭張つてるのではないか、ヤクザの愛人なのではないかななどなどといったよくない噂が生徒の間で実しやかに流れている。

実際はどうなのか分からぬし、あくまで噂のうちなのだろうけ

「色々あって、一緒に来たの。」

「ふーん? そいや、清田とは別だつたんだね。」

いつも一緒に来るじやん、彼女はそう付け加えた。

「うん。」

色々聞きたがるのは女の子の性なのか。にしても、後ろを向いて話してちや宿題が終わらないんじや? まあ、宿題している本人が話しひんでるから良いといえば、良いんだけど。

そんな心配をよそに、彼女は話し続ける。それにときどき相槌を打つて、手に頬をついて黒板をぼんやり眺めながら鐘が鳴るのを待つた。

「はい、みんな席に着いて下さい。」

そう言いながら予鈴と共にやつて来たのは、このクラスの担任の青沢先生。うちの学校で、わりと生徒達に人気の高い女の先生だ。その先生について来たのは、

「今日は転校生の紹介をします。」

開いた口が塞がらない、とはことなのかもしれない。正直、私は驚いた。まさかとは思つたけど、この学年、しかもうちのクラスにだなんて。

「今村……之人君、です。」

そう言いながら先生は黒板にチョークでフルネームを書いていく。
チョークの音が小気味良い。

“コキヒト”って、あんな字なんだ。珍しいと言えば珍しい。苗字は一緒なんだ、やっぱり親戚なんだね。安心した。

(あん、しん……安心?って、どうこいつ意味なんだろ?)

よく分かんないや、変なの。

「今村君、簡単に構わないので、自己紹介お願ひします。」

「はい。今村之人です。ここに来る前は他県を転々としてました。よろしくお願ひします。」

へえ、之人君の家は転勤族なのかな。他県を転々だなんて、大変だらうなあ。編入試験なんてショッちゅうだつたりして。でもそしたら凄いよね、頭も良いってことなんだろうし。あくまで推測だから分からないけど。

「今村君は、今村翔華さんの親戚だそうです。」

だから苗字が一緒なんだ、そういう意味のざわめきが広がった。みんな考えることは一緒なんだ。

「えっと席は……そうね、香住さんの隣が空いてるからそこにしましょう。香住さん、悪いんだけど後で空き教室から机と椅子を持ってきてあげてね。」

はい、ショートホームルームお終い。そう言って先生は教室を出でつた。その後一斉にみんなが教科書出したり、飲み食いしたり、お話を花を咲かせたりする。何人かの女の子たちが今村君の周りに集

まつていつたが、話もせじかに彼は切りあげられちやつてきた。

「空き教室に案内してくれるかな。」

にこりとあの笑顔を見せてくれた。うん、男の子にこりの人は失礼だけど、やつぱり可愛い。

「うん。あ、荷物重いでしょ? といふえず私の机に置いてなよ。」

彼の荷物を受け取り、ひとまず机に置いておく。その後彼を伴い、空き教室へ案内した。

「もう敬語じゃないんだね。」

道中、開口一番に彼はそう言つた。

「……だつて、朝会つたときには何年の人か分からなかつたし。」

もし自分が三年だつたなら、同じ年か下級生か、そのどつちかの選択しかないから今みたいに普通に話してた。

「朝、といえば、『あの事』誰にも言つてないんだね。」

之人君は、まるで世間話でもするみたいにそう言つけど、なんだか空気が肌を刺すようにピリピリとしている気がする。見てみると、彼は怒つてもいなければ笑つてもいない、本当に普通の表情をしていた。だから余計に怖い。

「どうしてわかったの?」

「みんなが俺を見る目が恐怖ではなかつたから。単純に、転校生に

対する興味くらうしか見当たらなかつた。」

ああ、だからわかつたんだ。

(もし言つたとしても、誰も信じてくれないよ。)

そう思つたけど、「これ以上この話をするのも憚れたので、その言葉は飲み込んでなかつたことにした。」

お話しながらだと、空き教室にはあつという間についた。之人君はとくに選ぶことなく、入り口付近にあつた机に椅子を乗つけた。

「それでいいの？選んだり、とか……」

「ぱつと見、みんな同じだし。」

「そうかもしれないけど…ほら、机の脚の長さがちょっとアレで、がたがたしちやうものとかも稀にあるじゃない。」

消しゴム使うときにガタガタするやつとか、凄く気になる。授業中、先生が説明し終えてみんながノート取つて静かな時とか、あと試験最中とか、一人だけがたがたしているとちょっと恥ずかしい。之人君は気にならないタイプなのかと聞くと、彼は君ほど気にはならないよ、と言つた。その苦笑気味な返答はいささか気になるけれども、その返事で彼は小さいことは気にしないタイプなんだ、そう思つた。かといって、私が神経質な性格といつわけじゃない。けして。そつこうしているうちに彼は机と椅子のワンセットをひょいと持ち上げ、すたすた歩いて行く。

「私が頼まれたんだし、私、持つよ？」

後を付いて歩きながら彼にそう提案するも、にこりと笑われ一蹴さ

れてしまった。

「重いし、いいよ。」

「でも……」

「大丈夫。俺が使うやつだから、自分で運ぶよ。それに、女の子に持たせて自分は何も持たないなんて、男としてちょっと、ね。」

そう言つこと気にするんだ。そして、言つちゃうんだ。普通の女の子だったら、こんななかっこいい男の子に言われたらひとたまりもないと思う。もう恋に落ちてるよ、きっと、いや絶対。かつこよくて、紳士的、うん、放つておかないだらうな。

「今日田の男の子はそんなことを全く自然に言えないよ。」

「そう?」

無意識に言つたんだろう。それって、凄いと思う。レディーファーストの意識が高いのかもしれない。

二人で教室に戻ると、そこには黒板消しを窓辺で叩く後姿があつた。黒板消しの掃除は週番の仕事であり、週番のうちの一人は姿が見えない。ということは、

「志信!」

振り向いた仏頂面は、まぎれもなく朝に別れた志信だつた。

私が大きな声で志信を呼んだため、主に女の子たちがこちらを振り向いたけど、今はそんなこと気にしていられない。志信の安否を確認する方が大事だ。そういう想いで、之人君に先に席に着いててもらつよろしく言い、志信のもとへと駆け寄つた。

「もう大丈夫なの?」

「まあな。怪我の痕だって、嘘みたいにないし。」

「嘘！それじゃあ、見せ

「るわけないだろ。」
「教室。」

教室じゃなきゃ良いの？そう聞くと、金取つてもいいならと言われ、その後、「一寧に鼻で笑われた。うん。」この毒舌な感じ、ちょっと斜に構えた態度、こいつらの志信だ。今村さんたちに感謝しないと。

「ほひ、早く席に着けよ。そろそろ本鈴が鳴るぞ。」

「うん。それじゃあ。」

志信に軽く手を振り、自分の席へと戻った。

あれから通常通りに授業が進んでいった。ただいつもと違うのは、空席だった左隣に今村之人君という転校生が座っているということ。彼の授業態度は良好で携帯とかをいじる事なく、黒板と手元のノートを視線が行き来している。ちらりと見えた彼の字は、男の子にしてはとても綺麗で、どちらかと言えば達筆な方だった。それを見た後に自分の字を見ると、正直落ち込む。

そして授業終了の本鈴が鳴る。やつとお昼だ。教科書類をしまおうとした時、ふと影がさした。見上げるとそこにはバッグを持った今村さんがいた。

「香住さん、一緒しない？」

彼女がそう言った瞬間、辺りが一斉に沈黙し、その後ひそひそと声を小さくしての話し声が広がった。今までまるで接点がなかつた私を誘つてるということは、つまり呼び出しをされてるんじゃ、なんていう誤解でもしてるんだね！

「良じよ。」

私の軽い口調での返答に、むちにあたりの声が多くなった。今村さん、気にならないのかな。

「あ、之人も来て。
「わかつた。」

親戚の之人君も誘つたことで、みんなは安心したらしく、それぞれ

の会話に戻つていった。

「あの、今村さん、志信も良い？」

「もちろん。いつも一緒に食べてたもんね。」

今村さんの許可も得たことだし、明らかにこちらを遠目で見ていた志信の許へ行き、今村たちも一緒に昼食を取る事を伝える。ちよつと不服そうな顔をしてるけど、半場強制事項だと悟つたのか、何も言わずにバッグを持った。

「んじゃ、付いて来て。」

そう言って先頭を颯爽と歩く今村さんに、私達三人は付いて行つた。ただ歩いてるだけなのに、今村さんはモデルさん並に綺麗でかっこいい。きっと、姿勢が良いからなんだろうな。

なんて勝手に今村さんを分析している間にも、彼女はずんずん進んで行き、階段を上つて扉を開ける、その先には青空が広がつていた。

「屋上で？」

「そ。」

今村さんは

中央に腰を下ろすと、早々に弁当箱を取り出した。それにならつて、私達も腰を下ろし、各自昼食の用意を始めた。志信と之人君はコンビニで買ったパンやおにぎり、私と今村さんはお弁当。というか、今村さんはお重だった。高校生の昼食にお重つて……。

「今村さんのお母さんって、凄いね。」

「いや、作つてんのはお手伝いさん。いつもはもうちょっと少ないけど、今日は之人が転校してくるから特別。」

お手伝いさんなんて言葉を事も無げに言いながら、割り箸を之人君に渡す。彼は小さく礼を言つと、それを受け取り、お重に手を伸ばした。

「二人も食べて。」

そしてバッグからもう一膳割り箸を取り出し、志信にも渡した。本来なら二人で食べるようになされたお重なのに、私達が食べても良いものなのか。と思いつつも、お重を見てみると明らかに一人では食べ切れなさそうな量なので、在り難く少しつまませてもらつた。とはいへ、私はお弁当があるから本当に少しだつたけど、いただいた出汁巻き卵は料亭で出されるような美味しさだ。

「で、今日のことなんだけど。」

そう切り出した今村さんの雰囲気、口調は何となくいつもより堅く感じた。

「一人とも誰にも言つてないみたいだから、現状維持をお願いしたい。それと、一人ともには我が今村に来てもらう。」

「今村さんちに？」

私と志信は顔を見合させる。

現状維持は良い。というか、あんなこと人に言えるわけがない。冗談なんかじやなくて、本気で言つてもどうせ笑われて終わるに決まつて。でも、なぜ今村さんの家に行く必要があるのか。まあ、警察に行つて被害届を出せと言われても困るのだけど。

「あたし達はアレを妖と呼称するんだけど、その妖つていうのは“餌”になるものしか襲わないの。」

「“H”って何だ？」

聞きなれない単語だと私は思っていたけど、志信もそうだったようで今村さんに問うた。

「えさ。」

とても淡白な答えだった。

「妖は力を有する者を好む。だから捕食する。そして、その被捕食者は大抵今村に連なる力を持つものが多い。」

その考へでいくと、さきほど襲われた私達のどちらか、あるいはどちらも力を有する者ということになつて、今村家に連なる力を持つ存在、ということになる。朝の一見ではどうなのかわからなかつたから、それを確認するつて意味で来てもらいたい、んだと思う。多分。でもわかんない。

「今村はそういう者達を集めている。だから、あんただちにまうちに来てもらひが必要がある。」

まあ、そういううな。私の読みは外れてはいなかつたらしい。

拒否権は、ない。今村さんの言葉にもそう含まれているのはわかつてゐし、その瞳が何より拒否するという選択肢を与へなくさせてゐる。一人だつたら正直嫌だつたけど、何より志信がいる。私より遙かにしつかりしていいる彼と一緒になら大丈夫だ。

「わかつた。どのみち、俺達はそう言つしかなかつたんだろうしな。

「

今村さんは何も言わない。沈黙は肯定なり、といいやつだろ。話がまとまとたところで、楽しい昼食タイムの再開となつたのは言うまでもない。

その後、予鈴とともに屋上を後にした。本鈴がなつて、授業が始まつてもなかなか身が入らない。今村さんちに行つて、何をするのだろう、何をされるのだろう。そう考えていると、とてもじやないけど授業なんて身に入らなかつた。それでも板書だけは何とか頑張る。そうして約一時間の授業を終えた。うん、長く感じた。入れ替わりに担任の青沢先生がやつてきた。

「はい、今日もお疲れ様。この後学級委員長の今村さんはちょっと残つて下さい。あーあと、清田君も。では、おしまい。さようなら。」

そういうと青沢先生は教室を後にした。

今村さんと、志信は呼び出しを食らつてゐる。待つてた方がいいよね? そういう人君に言おうとしたら、わざと帰る準備をしていた。

「先に行つてて、だつて。
「え……でも……?」

会話する暇なんてなかつた。

「何で、そう言いきれるの?」
「さつき翔華がこつち見て言つたんだ。」

私は聞こえなかつた。というより、先生が話してたから、大抵の人

は黙つてたんだと思うのだけ。

「まさか、読唇術、みたいな？」

「そ。みたいな。」

そういう間にも、彼はちゃんとバッグを肩にかけていた。こうしてはいられない、ということでおも慌てて準備をする。といつても、さつきの授業の用意をバッグに入れるだけだったから、そう時間は要らなかつた。

「じゃあ、行こうか。」

促され、私は一つ頷くと彼の隣を歩いた。

うん、わかっていたけど、正直たびたびの視線が痛い。彼は気付いていないのか、どこ吹く風という様子で世間話をしてる。なんか十人に一人の割合で女の子達がこっちを見てくる。そりやそうだよね、こんなにかっこいい男の子と私みたいなのが一緒に歩いてるんだから。あ、さつきの子たち、後ろで「彼女持ちとか残念……」って言つてる。ごめん、彼女とかそういう関係じやないから。

(つて、あれ? 何で胸が苦しいんだろう。だつて、事実だし。)

やつぱり私、変だな。之人君相手だと、なんだか調子狂っちゃう。

「ねえ、香住さん。さつきから心ここに有らず、つて感じなんだけど、もしかして緊張してる?」

その言葉にはつとする。彼にも分かるほどに、私は考えこんでいたらしい。

「つーじめん。考え方してて。」

「ふーん。あのさ君、ぬけてるって言われない?」

「言われないよ。」

「そう。(気付いてないだけ、か)」

そしてその後、世間話に戻る。好きな教科や苦手な教科、動物では何が好きか、どんな食べ物が好きで逆に嫌いなものは何か。本当に、ごく普通の会話だ。クラスメイトと下校する、ありふれた風景。

「ねえ、之人君って人見知りしないタイプ?」

「何でそう思ったの。」

「だつて、会つて初日の私と、普通に会話しながら下校してるんだもん。」

そつ言つうと、彼は小さく笑つた。何がおかしかつたんだろう、人の沸点つてわからない。

「するかしないかで言えば、まあ、する方かな。」

「ふうん、そうなんだ。」

私はたまたま大丈夫な相手だつたつてことなんだね。確かに、緊張するような存在でもないしね、うん。

そういうしてゐるうちに、住宅を抜け、どつかの森の中に入り、森の中には小奇麗な道を歩き始めた。五、六分歩くと突然開け、そこには高い木垣、大きな門、その奥にさらに大きなお屋敷が見えた。

「ここのが、今村さんちなんだ……。」

予想外に大きい。というか、規格外だ。この町に、こんな大きな家、

もとにお屋敷があるだなんて。

「さてと、じゃあ、行こうか。」

之人君に導かれるままに、私はその門を潜つた。

立派な庭園を横目に、スタスターと先を歩く之人君の後を付いていく。古風なお庭で、まさにお屋敷使用ですという感じ。池には橋が架かつていた。もしかしなくても、鯉とか泳いでたり……？
やがて向こうに、玄関の前に立つ一人の女性の姿見えた。

「ただいま、ユキさん。」

年の頃はおそらく二十代後半で、身に纏う薄緑の着物がよく似合っている。だからなのか、楚々としている印象を強く受けた。名前はユキさんといひらしい。

「おかえりなさい、翔華様からお話は伺っています。」

翔華様、と呼んでいた。あの今村家のお嬢様なんだから、当然といえば当然なのかもしれない。

今村家とは、この町のほとんどの土地を所有する言わば地主であり、町長も今村家には頭があがらないほど裏で実験を握っている黒い情報もあつたりする。

本当かどうかは定かではないから、何とも言いがたいのだけれど。

「香住さんですね。初めてまして、ユキと申します。」

「初めてまして、香住 秋穂です。」

「こんなところで自己紹介も何だし、中に入らない？」

「あら、私としたことが。そうですね、どうぞお入り下さい。」

玄関の扉をがらがらと引き、ユキさんはにっこりと促してくれる。

私なんかには敷居が高い家だな、なんて考えるもさくさくと勝手知つたる何とやらで入つていった之人君の後を慌てて付いていく。こんなところで一人置いていかれる方がよほど嫌だ。

少し歩くと、だだつ広い和室についた。座布団が用意されているし、みんなでここに集まつて話をするのだろう。

之人君は上座に近い座布団に座つた。なので私は下座の末席も末席である座布団に腰を下ろした。といつても、座布団は五枚しかない。先ほど自己紹介したユキさんはいつの間にか姿を消していた。こんな大きく、かつ静かな部屋に之人君と二人きりなんて、気まずすぎる。

「あの、之人、君。」

「ねえ。」

「はい?」

「俺のことば、名前で呼んでくれるんだね。」

沈黙を打破するために決死の覚悟で口を開いたにも関わらず、見事なまでに言葉を被せられた。小気味良いくらいに、鋭利なナイフですっぱりと切られたような、そんな気持ちになつた。

それはさておき。

「どうして?」

「いや、俺がどうしてって聞きたいんだけどな。」

苦笑氣味にそう言われた。

「香住さんつて今日見ててわかったんだけど、人のことは苗字で呼ぶタイプだよね。」

ああ、清田は名前で呼んでたね、と言ひ。

だから気になつたんだろう。別に深い意味はないし、説明するほどのことでもなのだけど、聞かれたからには答えないといけない。

「だつて、今村さんと苗字同じだから、どちらも苗字で呼ぶと紛らわしいかなつて。前から今村さんは今村さんって呼んでたし、そうすると名前で呼ぶとしたら後から会つた之人君の方だなつて。あと、志信は幼馴染で、ずっと昔からそう呼んでるからだよ。」

之人の家は共働きで、お父さんに至つては長期的に帰らない仕事をしている人だつた。だからよくうちに預かっていた。小さい頃から言葉通りずっと一緒にいた志信。もう兄弟のようなものであり、家族を名前で呼ぶことなど当たり前。

私の説明に納得したのかしてないのかはわからないけど、之人君はそうなんだ、と言つたきり黙つてしまつた。

沈黙再び、と思つたのも束の間、廊下を歩く音と人の話す声が聞こえる。がらり、と障子が開けられ、今村さんと志信と、後ろに小柄な女の子がついて入つてきた。

「待たせて悪かつたわね。さて、みんな座つて頂戴。」

今村さんはすたすたと歩いていき、上座に腰を降ろした。

凛とした表情で上座に座る彼女は、まさしく人の上に立つために生まれてきた存在なのだと思われる。いや、実際そんなんだろうけど。だって、クラス委員長だし。

私の隣には隣には之人君、前には志信、その隣つまり之人君の前に例の女の子が座る。

皆が座ると、控えめな声で失礼します、と入ってきたコキさんがお茶を出してくれた。

「あらがとうござります。」

セツコとコキさんはこりこりと微笑んでくれた。やっぱり綺麗な人なんだな、と思う。

皆にお茶だしが終わると、音も無く部屋を去っていった。

「とりあえず、白川紹介でもしようか。夏南ちゃん。」

「はー。初めてまして、一年の篠田夏南です。」

今村さんに促され、夏南ちゃんはよろしくお願ひします、と一礼してにこっと笑った。

「篠田は今村の分家筋で、治癒を得意とする一族なの。夏南ちゃんは、その中でも随一の力を持つてるんだよ。」

「そんなことないです、翔華様。」

分家、治癒、一族。ここは不思議な力を持つ人達が集まっているようだ。

「んで次、之人。」

「名前はみんな知ってるよね。俺の能力は体の一部を変化できる」と、かな。所謂戦闘型で、本家分家に関係なくこういった異能を持つ者は獵人、と呼ばれて今村当主の手足となり戦うんだ。」

異能、と言つた時に一瞬之人君の瞳が揺らいだような気がしたけど、瞬きした瞬間にはいつも吸込まれそうな真っ黒な揺らがない瞳に戻っていた。

氣のせい、だつたんだろうか。

「当主はあまりこの本家を離れられないから、遠方の妖を狩るのが、獵人なんだ。」

彼は学校で自己紹介をした時に、各地を転々としていたと言つていた。それは獵人ゆえで、当主である翔華さんの代わりに遠方の妖を狩る為だったのだということが今になってわかった。

転勤族だからとか、そういう生ぬるい理由なんかじやなかつたのだ。次は今村さんが自己紹介する番だつた。彼女は見ると、すつと背筋を伸ばして居住まいを正した。

「あたしは今村の現当主、翔華。あたしの使命は、妖を倒すこと。」

とんでも情報に言葉を失う。凄い人だとは思つていたけど、あの今村家の御当主さんだつたとは。通りで格が違うわけだ。合点がいく。ちらりと志信を見てみる。案の定、動搖とかそういう感情は見受けられず、いつもの淡々とした表情だつた。

「まあ、そんな感じ。で、次は志信。」

「IJKの場にいるみんなが知つてると思つから、バス。」

IJKの空氣でしれっと言いのける志信は凄いと思ひ。

IJKでちょっととした疑問。みんなが知つていると云つたけど、それは夏南ちゃんもつてことになる。

志信はもてるけれど、お世辞にも女の子との人付き合いは良いとは言えない。その志信が、しかも下級生の女の子と接点があるとは。

「清田と夏南ちゃんつて、知り合いなの？」

そんな私の疑問を代弁するかのように、之人君が一人に尋ねた。

「私も気になつてた。」

小さく之人君の言葉に便乗する。

「清田先輩とは、生徒会で一緒にあります。私、これでも一応生徒会書記なんですよ。」

なんと、夏南ちゃんも生徒会に所属していたらしい。なるほど、それで志信と知り合いなのか、納得。

とにもかくにも、これで自己紹介は終わつた。

今村の現当主、今村翔華さん。そして狩人であり、今村さんの親戚の今村之人君。この二人は何の因果か私のクラスメイト。そして後輩で一年生の篠田夏南ちゃんは、今村の分家であり治癒を得意とする一族の人間で、その中でも随一の力を持っている。うん、覚えた。

「どこから説明すれば良いのか悩むんだけど、とりあえず大事なと

「だけ説明するよ。」

あんまり難しい話だと理解するのに時間がかかるな、なんて考えて
いた私など今村さんは知る由もない。一呼吸置いてから、早くもな
く遅くもなく、聞き手にとつては聞きやすいテンポで話し始めた。

「昼に妖のことをついて話したと思うんだけど、アレがいつからい
たかはわからない。でも太古からいたとされている。基本的に食料
からの栄養摂取はいらないみたいだけど、血に飢えることがあるみ
たいで、そういうときは能力者を捕食、血を摂取するみたい。能力
の程度に関係無く、能力者である。ことが重要視されてるね。」

淡々と語られる妖について。急に今朝のことを思い出して身震いす
る。

あの妖は、確かに捕食する側で、自分達は捕食される側だった。現
代での人間は基本的に捕食する側であり、あのような捕食される恐
怖など普通に生きていれば感じることは無い。
為す術も無く、ただ最後の一瞬を待つしかできない恐怖。

「香住、大丈夫？」

見ると、心配げな表情で之人君がこちらを見ていた。

「うん、平気。」

あれだけ感じた恐怖が、自分で驚くくらいに、まるでお湯で溶
かしたみたいに、すうっと溶けてなくなつていった。

何で之人君?とは思えども、今朝驚くほどの身体能力を駆使して今
村さんと助けてくれたのを思い出し、ああ、だからか、と納得する。
あんな力を持つている之人君がそばにいるだけで安心できるのかも

しない。

「で、そんな妖を倒すために寄り集まつた能力者たちの子々孫々が、今村一族つてわけ。んで、戦いに傷ついた今村の人間を治してくれるのが、夏南ちゃん率いる分家筋の篠田つてどー。」

「翔華様！率いるだなんて、私は、そんな……。」

「何よ、似たようなもんでしょ。」

恐れ多いとばかりに、必死に否定する夏南ちゃんを今村さんは一蹴した。言いたい事はあるだろうに、不本意ながらにも夏南ちゃんは押し黙つてしまつた。

「一族の人間は妖の血を一度飲ませられるの。適合し、己の体を変化させることをできた人間は、本家分家に關係なく狩人となり、ゆくゆくは当主と戦う……うん、さつき之人が言つたからいいか。ただ、狩人つて本当に珍しい存在で、その代ごとに一人いれば良い方なの。狩人を持たない当主だって過去にいたし。そう考えれば、二人も狩人がいる今つて豊作だけど、異常なんだよね。」

「俺達を数年に一度実る果物かなんかみたいに言うなよ。」

呆れたように之人君はそう言つと、今村さんは「ごめんごめん」と謝つた。

「人も、ということは、之人君みたいな力を持つ人が他にもいるらしい。少し気になるけど、まあ、

そのうち見てみたいなぐらいの気持ちだ。

「妖と戦う、なんて言つたけど、能力者を保護するつていう目的もあるわけよ。で、各地にいる能力者を探したりとか、あと妖に関する情報収集とか、その他雑用諸々を受け持つのが、『暗^{くら}』

つていう一族。その中から当主直属の部下が代々一人輩出されて、
“燈織”といふ名を襲名するの。」

今村さんが言つては、「燈」とも、織る、と書いてヒオリと書つて
しい。

珍しい名前だな、なんて思つても、代々と言つからには昔から使われ
ていた名前ということがわかり、そう考えると今の名前の常識なん
て当てはまらないのだろうと納得した。

今こじにその燈織さんもいない。例の狩人さん同様、そのつむ合つ
てみたい氣もある。

「あと、これ大事。さつきの和服の似合つめつちやくちやきれーな
人は篠田ユキさん。夏南ちゃんのお姉さんで、この家の一切を取り
仕切ってくれるお手伝いさんなんだけど、何かあつたらいこの人に聞
いて。」

今村さんとユキさんは対極関係にある美しさだ。今村さんが陽とす
るなら、ユキさんは陰。前者が凄烈ならば、後者は儂い。

それにも、と思つ。

今村さんは、ユキさんに何があつたら相談すると良いこと書つた。で
も、相談するような何かがあるほどこの屋敷に来るだらうか？

「おい、今村。
「なに、清田。」

妙に漫才のようなやり取りに聞こえるのは私だけ、なのかな。
うん、そうだ。だってみんな普通の顔してるもん。

「話の流れから察するに、俺たちは今日付けでこの今村一族になる

のか?「

はつとして今村さんを見ると、彼女は頬を搔き、うーんと唸り難しそうな顔をしていた。

「いや、はつきりと能力が出たわけではないからねー。とりあえず一人はうちに泊まつてもらつて、力の覚醒をしたら一族に入つてもらつてことだ。」

さらりと言われたが、なかなか聞き捨てならない。

つまり、覚醒するまでこの家のお世話になるということである。修学中の学生が、他所の家に。しかも覚醒がいつになるか解らない上に、しないかもしれない。つまりどれだけここに滞在するかわからないのだ。それなのに親に何て説明すればいい。というか、許されるのだろうつか?

それに、覚醒したらしたで、一族の仲間入りは決定事項らしい。

「覚醒したらつて、曖昧だな。だいたい、親に何て説明すれば良いんだよ。」「

私の疑問を感じ取ってくれたのか、あるいは自分が疑問に思つたらなのか、私がどう言えれば良いのかわからずにぐるぐる悩んでいたことを、さらりと今村さんに聞いてくれた。おそらくは、後者の方で。

「そうだねえ……ま、うちで住み込みで勉強するつてことすれば良いんじゃない?それでも納得してくれなかつたら、燈織に電話してもらうから大丈夫か。いざとなつたら、記憶操作してもらうから……つて、そんなに怖い顔しないでよ。」「

記憶操作されても、痛くも痒くもないし、後遺症なんてないんだから。

そう今村さんに諭された。自覚がないだけで、そんなに私は怖い顔をしていたのだろうか。

でも冷静になつて考えてみると、一度妖に襲われている以上、また次がないとも限らない。もし家について、家族を巻き込んだりしたら？私なんかの力じゃ家族を守るどころか、返り討ちだ。私は何も出来ない。見ているだけ。今朝襲われた時にはつきりと理解した。身近なにいる大切な人を守るという意味でも、離れて暮らすことが一番に思える。

それに、一人じゃない。志信がいる。そう想つと心強かつた。

「そういえば今村さん。どうやって覚醒をせるの？」

まるで見当もつかない。志信をちらりと見てみると、彼も分からなりらしく肩をすくめて見せた。

「あんたたちにそれぞれマンツーマンで毎朝稽古をつけよつかと思つてる。」

ピシャーン、と後ろで雷が鳴つたかのような衝撃を受けた。稽古とは、あの稽古なのだろうか。肉体を鍛錬する、あの稽古のこと。自慢じやないけど、私はもの凄く体力が無い。且つ、持久力も無い。運動が嫌いなんでものじやない、運動そのものに嫌われてるんじやないかつてくらいに出来ない。

それなのに、毎朝。読んで字の如く、毎日の朝に、稽古をしなくちやいけないなんて。

「毎朝どこからには、回数を経て稽古をしないと、覚醒は望めない

「いつて」とか？」

「あら、さすが頭良いだけあるわね。副会長サマ。」「ぬかせ。学年一位のクラス委員長めが。」

ちなみに、志信は学年一位である。順位が一桁だなんて羨ましいかぎりです。

それはさておき、今の一人の会話から、覚醒を知るには地道に毎朝稽古をしないといけないことがわかつた。なんてことだ。毎朝来るであらう地獄を分かつていながら回避できないなんて。

「何か問題でもあるの？」

「俺はいいや。」

我が幼馴染様は、勉強ができる。加えて顔も良い。それだけでも十分なのに、スポーツも万能ときた。スポーツ推薦で学費免除で入れる高校が数校あつたにも関わらず、私と同じ偏差値も平均並みの宮野森に来たんだから勿体無い奴だ。

「ただ、秋穂はキツイだろうと思つて。」

「香住……あー。」

哀れみをいっぱい込めた目でこちらを見る志信に沸々と怒りが湧いてきたのは仕方が無いことだと思う。思うのだけど、今村さんのその微妙な反応もぐさりとくるものがあつて、私の心中はもう「じちや」「じげや」になっていた。

「香住って、体育苦手なの？」

純粹に疑問に思ったのか之人君がそう聞いてきた。その質問、今だけは聞きたくなかったなんて、言えるわけもない。

どう答えよつか悩み、しどりもどりになつていた私を差し置いて口を開いたのは志信だつた。

「苦手、なんてもんじやない。運動音痴なんだ。その上、ぼーっとしてゐ奴だから、もつ田も当たれないぞ。」

絶句とはまさにこの事。開いた口が塞がらない。

そこまで言つた、普通。怒りでわなわなと小刻みに震える、膝に置かれた私の手を見て慌てて夏南ちゃんがフォローを入れてくれる。

「清田先輩、言い過ぎですよ。それに、得手不得手は誰しもあるものです。」

「秋穂の運動神經の無さを田の辺たりにすれば、お前だつてそんなことも言えなくなる。」

もはや撃沈。

フォローを入れてくれた夏南ちゃんには悪いけど、もつ何も言えない、何も考えられない、何もしたくない。

毒舌の幼馴染を持つてしまつた自分をこれほど呪うことはないだろう。

「まあ、体力を使った覚醒度を上げる稽古もあるけど、そんな運動能力を必要としたものにはしないからさ、俺と一緒に頑張りよ。」

慰めるかのように、之人君にぽんと肩を叩かれた。優しいな、之人君は。じゃない、それどころじやなくて、もしかして之人君は朝稽古のお供を志願してくれたのだろうか。私なんかの?今日会つて間もない私なんかを?いやいや、何の冗談を。

「翔華、とりあえず香住の当面の朝稽古は俺が引き受けけるよ。もし

覚醒したら、その質によつて稽古つける奴はまた決めなおした方がいいと思うけど、まあ、それまで。」

今村さんはどう考へてるんだろ？。そう思ひて彼女をちらりと見みると、何か思うところがあるのかじっと之人君を見ていた。何か言いたそうに口を開くも、その口から言葉が出ることなく閉ざされた。

「……翔華様？」

何か言いあぐねている今村さん心配するよつて夏南ちゃんが問いかけるも、今村さんは何でもない、とひとつ頭を振つて答えた。

「俺だつて“こうじうこと”をやつてみたくなつたんだよ。」

「……あんたがそう言つなら、そななんだろ？。あんたは、隠し事をしたり煙に巻いたりはするけど、嘘はつかない。」

之人君は、にこにこと笑つていた。彼は肯定もしなければ、否定もない。ただ、笑つているだけ。

彼がこれ以上何も言つ氣が無いと悟つたのか、今村さんは一つ溜息を吐いた。

「まあ、いいわ。そういうわけで、香住の指南役は之人が。清田の指南役は……やっぱ奏季か。」

「そういえば、今夜帰つてくる予定でしたっけ。」

「夕飯にはいるだろ？から、そん時にでも説明するか。」

「奏季さん、姉さんの料理好きですもんね。」

トントン拍子、とは行かないまでもわりとスムーズに私の指南役は之人君に決まった。

そして志信の先生も。名前はソウキさんと言つらしく、今は外出しているよう。なんと夕飯の時に顔合わせらしい。それでいいのだろうか。

ちなみに、夏南ちゃんのお姉さん、つまりユキさんの料理が好きという「うん」。彼女は夏南ちゃんの「うん」と同じく「うん」と答えた。

（うん、本当にプチ情報。）

「さて、そういうわけで、あたしからの説明はおしまい。夕飯まで時間あるし、夏南ちゃん、二人にこの屋敷の案内でもしてあげて。」「はい、翔華様。ではお二人共、行きましょう。」

夏南ちゃんに促され、席を立った。

一応今村さんにお辞儀をして、部屋を出ようとしたら、之人君がにこにこと笑いながら手を振つてくれたので私も小さく振り替えしてみた。

之人君の表情が一瞬固まつたけど、先に部屋を出ていた夏南ちゃんと志信を追いかけていつたため、私はその表情を見ることはなかつた。

その後夏南ちゃんには、今村さんに言われたとおり壁敷を案内してもらつた。

ただ、全部を見て回る時間は無かつたから、日常生活中に使用するところだけを重点的に教えてもらつた。自衛隊もひろべのことで、お手洗いや洗面所とお風呂、稽古場になる道場、他のみんなの部屋や中庭。

「それにして、とすが今村家。」

そろそろ食堂に向かつた方が良いことじで、夏南ちゃんに案内されながら私と志信は感想を言いつついた。

「純日本家屋に、この広さ、期待を裏切らないね。」

「沢山の方がいらっしゃいますから、客間が多い分広く感じるんだと思います。」

なるほど。かくこう私と志信も、当面は客間に寝泊まりすることになつた。なつたのだけれども、広い。いつも数えてみたら、一十畳あつた。しかも床の間もついて、生花が飾つてあるという。ちなみに、ユキさんが生けている。ユキさんつて、お手伝いさんの鑑だと思います。何でもこなせる素敵なお姉さん。夏南ちゃんが羨ましい。

「せうこえぱ、夏南ちゃんも生徒会に入つてるんだね。」

「はい。書記なんで、生徒会長と違つてマイナービーナーだし、私の認知度つて低いんですけどね。」

その言葉に、つい詰まってしまった。

確かに私は、彼女が生徒会役員だと知らなかつたのだ。

痛いところをつかれてぐうの音も出ない私を知つてか知らずか、夏南ちゃんは明るい声で、まあいいんですけどねーと言つていた。

「ところで、香住先輩。清田先輩とはどんな関係なんですか？今日、一緒に登校してたつて聞きましたけど。」

この質問、久しぶりに聞いたから懐かしい。

入学したての頃は、私たちの関係を知らない同じクラスを始め他のクラスの女の子がよく聞きにきた。

もともとの幼馴染をもつ宿命のようなものだと理解してたから、ちやんと答えてたけども。

そういうわけで、私たちは幼馴染で、家も近いから一緒に登校するということをご理解いただけたわけだから、こいついた質問をする人は最近ではいなくなつていた。

（新入生の子は、上級生に聞きにくいだらうじ。）

下級生、つまり今年入学してきた一年生の中でもやっぱり志信の人気は健在のようで、志信とすれ違つた後にきやつきやしてるのを何度も見たことがある。

（つまり夏南ちゃんも志信のこと……？）

先輩、と呼ばれて、夏南ちゃんの方を見てみると、何だか困ったような顔をしていた。

「何か勘違いしてるみたいで、私、清田先輩のファンとかじ

やないですから。ええ、まつたく、これっぽっちも。」

「おい、篠田。本人を前にしてそこまで言つか、普通。」

「あら、先輩いたんですね！気付きましたー。」

「お前な……。」

飄々と言つてのける夏南ちゃんに、脱力。今の志信はそんな感じだつた。

女の子に対して、そういう態度を取るのは志信にしては珍しくて、正直驚いた。

「でも一人、仲良いよね。志信が女の子にそんな碎けた態度とるの珍しい。」

「明らか、恋愛感情が無いからじゃないですかね？」

つまり、夏南ちゃんから、志信にベクトルがまるで向いていないといつ。

これはこれで男としてどうなのよ、と通常は思ひ。しかしそれが通用しないのが志信で、寄られた女の子には冷たく接し、基本的に女の子には興味無いようなそぶりをする。

そんな志信にとって、同じ生徒会役員で、自分を恋愛対象として見ていない夏南ちゃんは仲間意識が芽生えやすく、打ち解けることが出来たのだろう。

「あ、先輩の幼馴染さんに魅力がないっていうわけじゃないんですよ？ただ、私には別に好きな人がいるってだけで……。」

「そつそつなんだ。」

焦つたようにフォローをしてくれた夏南ちゃん。でもその手の話題にどう反応したらいいかわからなくて、当たり障りない返事しかできなかつた。

殆ど私と夏南ちゃんが話しながらだつたけど、ビーフやひじきの食事に着いたらしく、夏南ちゃんが襖を開けてくれた。

(うわー。)

一言で言つと、長い。

おそらく三十から四十人は席に着くことができるであろう長方形の長いテーブルが中央に置かれている。
旅館の宴会会場を思い出します。

(ううが、食堂?)

食堂などと、何となく学校や会社の食堂だつたり、食堂屋さんのそれを思い浮かべる。というか、思い浮かべてた。大つきいテーブルが何個かあって、パイプ椅子が何脚も用意されている、あの食堂風景を。

ある意味、良い意味で期待を裏切られた。

この屋敷には、やはりこいつは食事部屋であるべきだ。

「随分大きなテーブルだけど、まさか今からこんなに人が集まるのか?」

「いいえ。これが標準仕様なんです。この大きさで、数人でしか食べないってことに違和感を感じるようですが、みんな徐々に慣れてくれみたいですね。」

それはつまり、慣れるほどにここを利用すべしことの屋敷に滞在するということなのか。
ホームシックにならないことを祈りつつ。

さすがに襖の所で立ち話をするのも憚られてきたので、その部屋に入つた。

「席は好きなところにどりつけ。」

「好きなところ……。」

「迷いますよね、やっぱり。まあ、みんな、早く来た人から奥の方に詰めて座つてきますよ、だいたい。」

始めからそう言つてくれれば良いのに。なんて思いながら、奥の方に詰めて座る。

私の前が、志信、そしてその隣が夏南ちゃんになつた。

「早かつたんだね。」

そう言つて入つてきたのは、之人君だった。なんと彼は学ランではなく私服で、白のVネックに、グレーのジャケット、深い緑のカーゴパンツ。アース系の穏やかな色合いは嫌いじゃない。彼はここにこと笑いながら、私の隣に腰を下ろした。

「私服だと印象変わるね。」

「え？あ、ああ。そうかな。ていうか、会話のキャッチボール出来ないよな。」

「そうかな。」

香住らしいな、と笑いながら言われた。

その笑い方は不愉快にさせるものではなく、どちらかと言えば嬉しいものだった。

「あー、集まつてる、集まつてる。」

がらり、と襖を開けて入ってきたのは、之人君と同様に私服姿になつた今村さんだつた。オフショルダーの赤いミニワンピースに、黒いレースのショートパンツといつ出で立ちで、本当に今時の女の子といった装いだつた。

それなのに、手に持つてゐるのは刀。一見ちぐはぐな組み合わせだけど、今村さんはなぜかかっこよく見える。

今村さん、之人君、二人の私服を見て思い出す。夏南ちゃんだ。彼女はさつきの顔合わせの後、私達を案内してくれてたから着替えの暇がなかつた。そのため、今も制服である。

「夏南ちゃん、着替えたかったよね？」

小首を少し傾げる仕草は、普通の女の子がやれば氣取つて見えるかもしれないが、彼女がやるから可愛らしく見える。

「今村さんたち着替えたみたいだけど、私達を案内してくれてたら着替えられなかつたよね。ごめんなさい。」

そう言つて謝ると、夏南ちゃんはにこっと笑つて、良いんですよ、と言つてくれた。

うん、良い子だ。夏南ちゃんって、良い子だ。

「さて、そろそろご飯にしますか！」

今村さんがそう言つて之人君の隣に腰を下ろした直後に、すらり、と襖が開けられたかと思うと、そこにはコキさんがいた。お盆には沢山のお皿が乗つてゐる。

「 鮎ちゃん、お腹が空きましたでしょ。」

お盆に乗っていたお皿をどんどん並べて行く。それらは彩りや盛り付けの趣向がいろいろとある上に、栄養バランスも考えられているように見える品々だった。

コキさんは一度空になつたお盆と共に部屋を出たかと思ひと、今度は汁椀といい飯茶碗の乗つたお盆を持ってきてくれたの前においてくれた。

「 おかわりもあるので、遠慮なくおっしゃってね。」

そして、ドアの付近に下がつて行った。

「 冷めなこつちに食べよつか。」

今村さんの言葉を合図に、夏南ちゃんや之人君がそれぞれのタイミングで箸をつけていく。

私と志信は顔を見合わせた後、各自いただきます、と言つて料理に箸をつけた。

(うわあー)

驚いた。お料理はどれもこれも予想以上の美味しさで、いつもはこんなに食べないといふのについに食べ過ぎてしまった。

来た初日にこんなに食べる客人、しかも女の子ってどうなんだろうと思ふ、夏南ちゃんと話しながら食べている今村さんを之人君越しにちらりと見てみると、同じくらいの量を食べていた。これは普通の量なんだと安心して夏南ちゃんを見て絶句した。

(あ、あれ?)

夏南ちゃんの前にあるお皿の料理の減りが異様に早い。もつそろそろなくななりそうだった。

「びっくりしただろ。」

私の考えていることがわかつたのか、之人君が苦笑しながら若干ひそめた声で言う。

「あの子、小柄な割によく食べるんだよ。」

にも関わらず、ぽっちゃりさんじやないなんて羨ましい限りです。

「人一倍頑張り屋だから、修行もハードだし、その分お腹が空くのかもね。」

なるほど。運動量が多い分、食欲旺盛で、摂取したものは体に脂肪としてつかない、そういうことなのか。

根っから文系気質の私には真似出来そうにもない。

「そういえば……」

口を開いたその時に、すぱん、と小気味良い音をたてて襖が開けられ、そこには一人の男の人人が立っていた。

第一印象、今時の若いお兄さんだった。

シルキー・ッシュの襟足だけ少し長めにとっている髪の毛、両耳にはそれぞれ一個のシルバー・ピアス。そして黒のスーツと、ボタン三つは開けられている紫のサテン地のYシャツ。

(……ホスト?)

夜の人と見紛う風貌に、身構えてしまう。

いや、本当にホストかもしれない。

ホストさんは、つかつかと歩いてくると今村さんの前、つまり志信の隣りに腰を下ろした。

「おかえり、奏季君。」

たしか、志信の指南役になるだろう人だった。それが、この人らしい。

まあ、強いて言うなら、外見でいうなら正反対。こんな正反対のペアで大丈夫なんだろうか。いや、大丈夫と信じたい。

「当主、この子達が今回保護した子ってことすか?」

私と志信を一瞥すると、今村さんに問いかける。その言葉に今村さんが頷いたのを見ると、男の人は一瞬複雑そうな顔をした後に、すぐまた笑顔に戻した。

「んじゃ、」挨拶から。初めまして、俺は今村奏季。奏でる季節つて書いて、奏季だ。今村において俺の役目は、狩人。その大人とは……まあ、会社で言つといふの同僚つてやつだな。出張が多い之人に對して、俺は本社勤めが主だ。保護した力ある人物らを教育するのは、そういうわけでほつとんど俺。ヨロシクよー。」

一息に噛むことなく呑つ淀みなく、奏季さんはそう言つた。私だつたらきっと噛んでた。それがわかつてゐから、長くは話さない。

だから彼は凄い、と思つ。

「初めまして。清田志信です。清い田畠に、志すと信じるつて書きます。」

「初めまして。香住秋穂です。えっと、香る住所で香住、季節の秋に稻穂で秋穂と書きます。」

思えば、自分の氏名の漢字までも自己紹介したことはあまりない。だからなのか、一瞬戸惑い、その結果志信が先に挨拶する形となつた。

「志信と秋穂ね、了解。」

楚々とした仕草でユキさんはビールとグラスをお盆にてやつてくると、奏季さんの横に膝をつきグラスを渡す。彼は慣れた様子でそれを受け取り、斜めに傾ける。ビールがみなみとつがれる。奏季さんは軽く礼を言つた後、それをぐいと煽つた。

「やっぱ仕事の後はこれだよな！」

同意を求めるかのよう、にこっと笑つてこちらを見る。

(うーん。私に言われてもな。)

そんな微妙な私の感情を理解していくかどうかはわからないけど、今村さんがざつくり切り込んできた。

「奏季君、あたしたち未成年だからね。」

「すんません、当主。ついね、つい。」

若干冷汗かいてるよう見えるのは氣のせいじゃないはず。当主って、今村さんって、凄いんだね。改めてそう思います。

「それで奏季君にはその隣の志信にだけ指南お願いしたい。」「えっ！」

志信を見て、それから私を見て、最後に今村さんに視線を戻した。

「秋穂は？」

そりや気になるよね。一人いるうち、一人だけの指南を任せられれば。聞かれた当人はお茶を啜っていたのをやめ、湯呑をとん、とテーブルの上に置いた。

「之人直々の申し出で、任せることとした。」

「ゆ……之が！」

何だつてとか、えらいこっちゃと騒ぎながら斜め向かいに座る之人に身を乗り出して詰め寄つてくる。

その様子に若干引きつつも、之人君は答えた。

「俺もやってみたくなって。」

周りにしてみたら結構淡白な答えだつたのに、奏季さんにとっては十分すぎるくらいのものだつたらしくはしゃいでいた。それはもう、女子高生並に。

「ちよつとおま、何なの！今までこいつでのことは全て俺任せで、自分は遠征遠征だったのにわつ。そうか、俺を敬い崇め、助けようといつ」

「違う。そんなんじゃないよ。」

奏季さんの方も見ずにはしゃうと言ひ放つた彼はなんだか怖い、ような気がする。

がちょーん、と分かりやすく落ち込む奏季さんを放つておき、之人君は人通りお腹が満たされたのか、箸を置いて食後のお茶を堪能していた。

「ご馳走様でした。さて翔華、俺は先にお暇させてもいいつよ。」

「えつ？あ、うん。」

いきなり話題を振られて驚きつつも今村さんは答えた。

挨拶は済んだ、とばかりに席を立ちすたすたと歩いていく之人君は何を思ったのかぴたりと足を止めて半身を振り返った。

「さうさう。香住、明日の朝六時に道場ね。動きやすい格好で来なよ。」

その言葉に私が返事するよりも前に踵を返して去つて行った。

私は考えた。動きやすい服はいいのだけれど、学校帰りにそのままここに来たのでこの着ていい制服しかない。ジャージは体育が無かつたから家にある。
「うん。明日の午前中でも取りに行つてもらおうかと思つたんだけど……さすがにやっぱ着替えは欲しいよね。」

「今村さん、私たち着替えをまるで持つてきてい状態なのですが。」「どうが、生活に必要なもの全般を家にあるのですが。」「正直、その……下着はほしことひりです。一応、これでも女の子だし。

「香住、志信。この後、帰宅して荷物取つて来なよ。あ、でも、奏季君と之人はつけるけど。」

そんなこんなで、一時帰宅することになったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9308x/>

螺旋の絆

2011年11月29日19時53分発行